

地熱発電 核燃料の被覆管

技術開発の現状報告

室工大

室蘭工大の環境・エネルギーシステム材料研究機構は7日、室蘭市内で特別講演会を開き、同機構が研究して

いる地熱発電技術開発の現状などについて研究者が報告した。

機構長の香山晃教授は新方式の地熱発電の技術開発について、水を地下に送り込み、地熱で温めて回収するた

めガスの発生がないなどの利点を強調。九州で行う実証実験では「本年度中の発電には至らないが、地下で温められた高温の水を、圧力をかけることで液体のまま地上に持つてくることは可能」とした。

室工大の岸本弘立准教授は、核燃料を覆う管に炭化ケイ素を活用する研究を報告した。福島第1原発では核反応後の発熱を抑えられず、管が溶けたことが



事故の一因とし、現在使われている合金よりも融点が約千度高い炭化ケイ素を使

う方法を紹介。「長さ1メートル級の管を作る製法開発が課題」と話した。

京都大原子炉実験所の山名元教授は、民主党政権が掲げた2030年代までに原発ゼロを目指す計画について「(輸入頼みの)液化天然ガスや石炭による火力発電を増やせば、資金が海外に流出するだけ」と指摘。「原発を寿命を延ばし、当面は発電量全体の20%程度は維持するべきだ」と持論を述べた。

(吉田隆久)